

埋蔵文化財と文化財建造物の情報誌

文化財センター季刊情報誌

【かざぐるま】

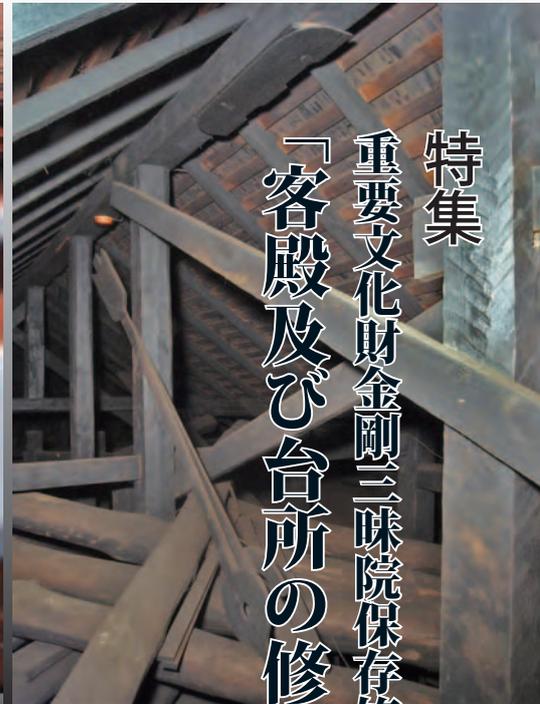
2010夏号

51

財団法人 和歌山県文化財センター

風車

紀州の歴史と文化の風



特集

重要文化財金剛三昧院保存修理工事
「客殿及び台所の修復トピックス」



連載

埋蔵文化財課短信

考古学の散歩道

「海人の世界」

きのくに歴史小話

「建築彫刻の話」

「発掘屋余話」

上左上：現在修理中の外観
上左下：上段の間西広縁の現状
上中：上々段（手前）と上段（奥）の天井。この彫刻の様式から、江戸時代前期の建たと推定されていた。
上右：玄関小屋裏。中央上に棟札、左に上棟式に使用する「矢」が残る。
下：上段の間西広縁の当初の姿。

客殿及び台所の修復トピックス

客殿及び台所の修理工事も開始から二年が経ち、解体していた床組なども組み上がり、木工事の完了が近づいてきました。今年度からは屋根工事に取り掛かり、一年半かけて約千平米（約三百坪）の松皮屋根を葺きかえます。今回の特集では、これまでに解体修理を行った部分の調査などにより、新たに判明した事柄を紹介します。

今回の修理で一番期待したことは、建物の建てられた（建立された）年代が判明する直接的な史料の発見でしたが、残念ながら建立に関わる棟札や墨書などは見つかりませんでした。しかし「年輪年代法」の結果や、その他様々な発見により、建立年代がしばらくは明らかになり、建物が改変されていく過程をかなり明確に辿ることができました。

年輪年代法とは、一年に一つ作られる木の年輪の間隔を測ることにより、その木がどの時期に生長したのか特定し、条件によっては伐採された時期が一年単位で判明する調査方法です。奈

良文化財研究所に依頼して柱数本を調査したところ、最も遅い柱で一六一九年から一〇年程度後に伐採されたことが判明しました。（写真①）この結果は、これまで建物の様式などから江戸時代前期頃（一七世紀前半）の建立とされていたことの裏付となりました。

さらに柱などに残された様々な痕跡や、解体途中で見つかった墨書などにより、建立当初（図1、推定図）から現在（図2）まで、大きく分けて七度の改変が行われていたことが判明し、各時期の姿と変遷をまとめることができました。

今回の修理で見つかった墨書をいくつか紹介すると、寺務所の床の間（写真②）と角の間の鴨居（写真③）には年号の記された墨書があり、上段の大床裏には写真④のような落書きと年号が記されており、その他にも建具には年号こそないものの、多くの墨書が残されています。（写真⑤）

大きな改変が行われた箇所を挙げる

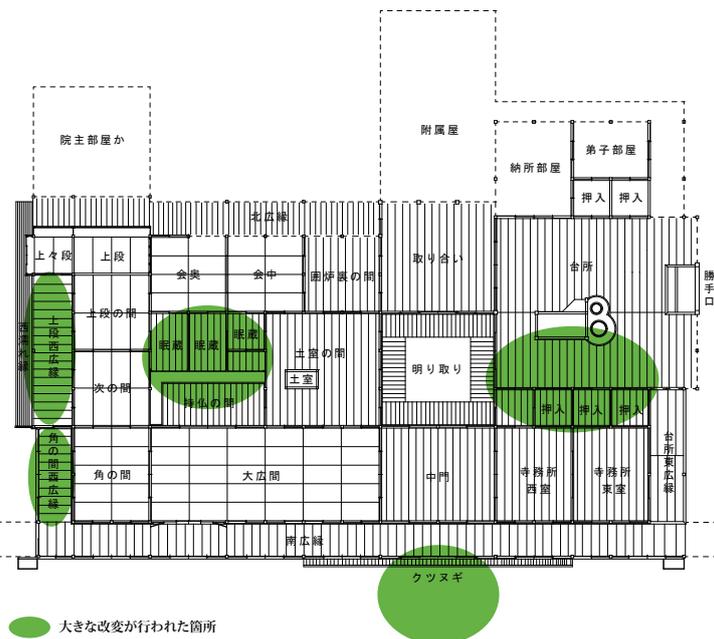


図1 当初平面図（推定・点線部は想定）

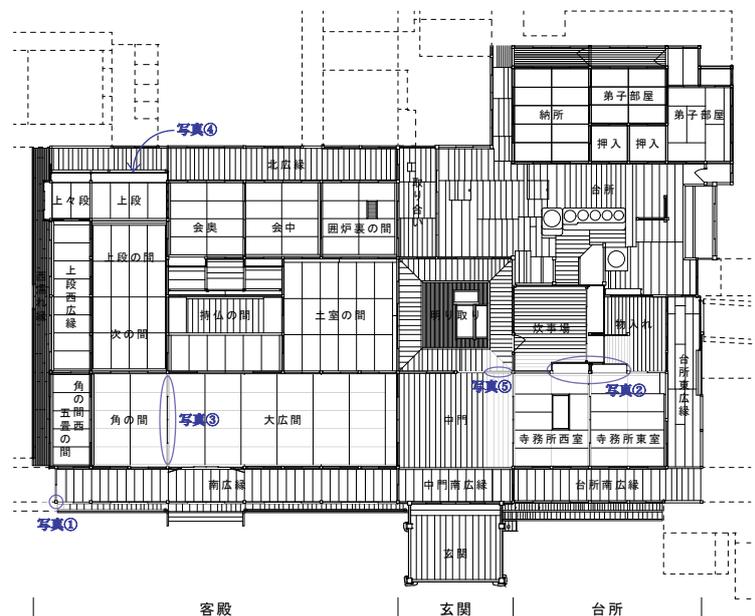
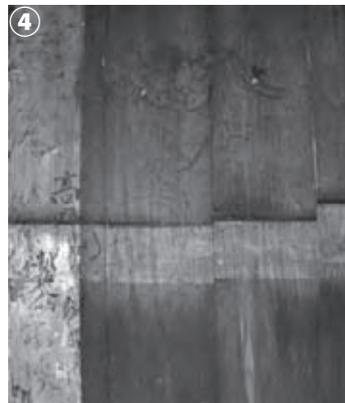
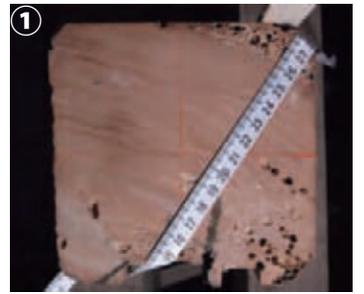


図2 現状平面図（点線部は文化財指定範囲外）



写真①調査は修理の際に切断した柱木口を写真撮影して行った。
 写真②墨書より寛政三年(1791)に造られたことが判る。
 写真③鴨居上面に記されていた安政五年(1858)の墨書。
 写真④虎や人の絵の他、宝永二年(1705)年の墨書が見つかった。
 写真⑤建具に残る墨書。
 写真⑥玄関小屋裏に残存していた棟札。

と、客殿及び台所の正面中央に当初はなかつた玄関が宝暦八年(一七五八)に建てられました。(棟札により判明、写真⑥) 客殿部分では、角の間西広縁と上段の間西広縁が畳敷きの部屋に改変され、持仏の間北側にあった三室の「眠蔵」がなくなつた代わりに、持仏の間が拡張されました。台所部分は、南端の寺務所と北端の納所部屋の間は、当初は天井を張らず小屋裏まで吹き抜けの大空間でしたが、現状はその間に間仕切りを設けて部屋に区切るなど、大きく改変されてきました。

修理に当たり、建物本来の価値が明確な姿(当初に近い姿であることが多い)と、使い続けるための機能を考慮した姿(現状に近い姿であることが多い)の相反する条件を出来るだけ満たす方法を検討した結果、今回は客殿部分では現状のまま修理を行い、台所部分では近代以降に改変された部分を撤去して当初に近い姿に戻す修理を行うことになりました。

この中で、上段の間西広縁は当初は外側に建具が入っておらず、開放的な空間でした。そこで、その雰囲気

感するために組立の工程を調整して、一時的に当初の姿を再現してみました。(表紙写真、今後建具を組み立てて元通りの畳敷きの部屋になります)

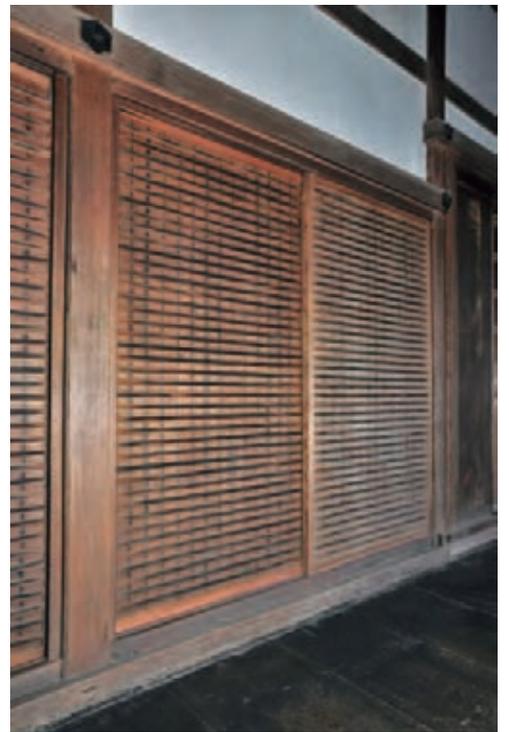
調査をしていて気が付いた面白い発見を紹介しましょう。実はこの建物には、太さの異なる二種類の柱が用いられていました。大広間と角の間は一辺が一四センチメートル(四寸六分)の柱、それより北側の部分は一辺が一・二・六センチメートル(四寸二分)の柱と、約一センチメートルの差があります。見た目にはあまり気が付かない差ですが、なぜこのようになったのでしょうか? 明確な理由はわかりませんが、この建物が建てられる前に存在した建物と何か関連があるのであるのか、と考えています。(この前身建物の概要は発掘調査によって判明し、風車四六号で紹介しました)

もう一つ、大広間と角の間の南面には舞良戸と呼ばれる、細い木を横に何本も組んだ建具が入っています。この舞良戸、実は左右で幅が異なっています。他に例のない珍しい仕様ですが、こうなるのには訳がありました。

柱には辺付けという材料が付いていて、建具を開けると開けたほうの建具がこの辺付けに当たります。建具の幅が同じだと、開けたときに辺付けの分だけ建具が飛び出してしまいますが、開けたときに建具の端が揃うように、ちようど辺付け分だけ建具の幅に差がつけられているのです。また舞良戸の内側に入る障子も、開けた時に端が揃います。さらに、襖もこれと同じ造りになっていました。

こんな風に様々な寸法の建具を作るのはとても手間の掛かることですが、一体何故そうしたのでしょいか。これも理由はわかりませんが、当時の職人さんは如何にして建物を美しく見せようかと創意工夫をして、このような細やかな配慮をしたのかもしれない。

(結城 啓司)



上右：舞良戸を閉めた状態。この状態では、建具の幅に差があることには気が付かない。

上中：舞良戸と障子を開けると、建具の端が揃う。建具の幅が同じであれば当然こうなるので、こちら側から見ると特に疑問は感じない。

左上：しかし、内側から見ると、開けた方の舞良戸は辺付けに当たっていることがわかる。

左下：両方の建具を同じ幅だけずらしてみると、建具の幅に差があることがよくわかる。この差が、辺付けの幅と同じになっている。

下右：建具全体を見ると、見落としそうなほどの差しかない。
(障子は取り外しています)

坂田遺跡の発掘調査

調査地は和歌山市坂田です。調査の原
因は県道三田三葛線改良工事の計画がも
ちあがり、その予定地の一部が竈山神社
古墳に及んだため、県文化遺産課が道路
建設予定地内において、確認調査を実施
したところ、遺構の存在が明らかとなり、
本調査が必要との判断に至りました。

調査地の南側には宮内庁御陵である竈
山神社古墳が「彦五瀬命墓」として管
理されています。彦五瀬命の逸話は「日
本書紀」に記載され、命は神武天皇の兄
であり、神武東征のおり、流れ矢に当た
り負傷し、この竈山の地で没したことが
記されています。これが「延喜式」の諸



調査地全景 北から

陵式にみえ
る竈山墓で
す。
発掘調査
の成果とし
ては、古墳
時代（五世
紀）六世

紀）、古代末（平安時代後期・一〇世紀）、
中世（鎌倉時代・一三世紀）の三時期の遺
構や遺物を主に確認しました。

古墳時代では溝や井戸と考えられる遺
構、平安時代では立派な掘形（柱を立て
るために掘る穴）の掘立柱建物四棟を見
つけました。これらの建物は御陵の北側
に隣接して見つかったっており、御陵に関係
した建物の可能性が考えられます。鎌倉
時代の遺構は掘立柱建物、土坑、溝、井
戸（石積み井戸・素掘り井戸）、柱穴など
を見つけました。

今回調査した地区は、地形的に東側の
微高地と西側の低湿地に大きく分けるこ
とができます。前述した三時期の遺構は
微高地で確認しました。低湿地では南北
方向に延びる中世の自然流路を三条見つ
け、これらはいずれも底の高さから判断
して北に向かって流れていたようです。

出土した遺物で特に紹介しておくもの
に琴柱形石製品があります。この遺物
は古墳から出土するものが殆どです。と
ころが中世（鎌倉時代）と考えられる遺

構から出土しました。このことから中世
の時期に、この辺りの土地は大きく様相
が変わったことが窺えます。

琴柱形石製品の名前の由来は、琴の弦
を支える琴柱に似ていることからこのよ
うに呼ばれています。今回出土したもの
は滑石製で、高さ二・五cm、幅二・五cm、
厚み〇・七cmの大きさです。これの四隅
には直径一mmにも満たない細い孔があけ
られています。さて、琴柱形石製品の用
途は何かというと、今は未だ正確なこと
はわかっていません。全国の出土例では、
古墳の被葬者の頭部付近から発見される
ことが多く、それも女性に限っているそ
うです。このことから女性の髪を飾って
いたものか、護符の様なお守りという説
が有力です。琴柱形石製品が出土したこ
とで、この辺
りには古墳が
存在した可能
性が大きいと
言えます。

（佐伯和也）



琴柱形石製品

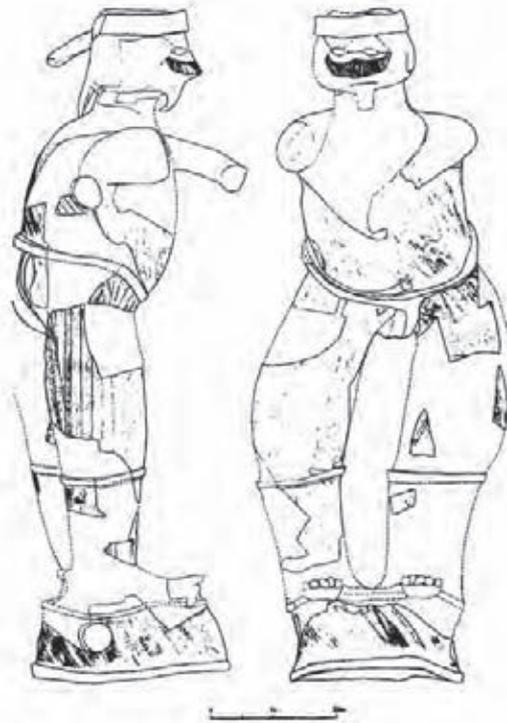
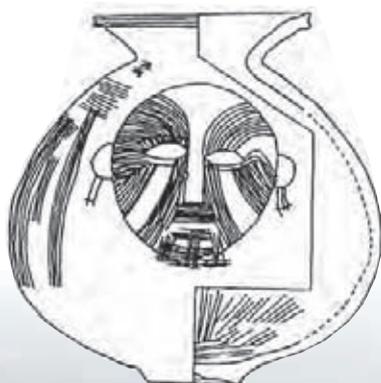
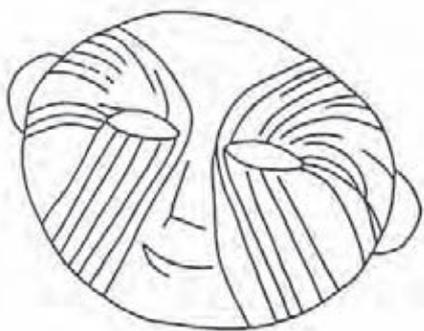
海人の世界 — 文身 —

富加見 泰彦

去年は、紀伊の古代寺院について連載をしましたが、舞台を陸から海に転じることにします。今年^{かいじん}は海人について連載をしたいと思います。聞きなれない海人とはいったい誰のことでしょう。わたしなりに、海を専らとして生計を立てている人と解釈しています。具体的には、漁撈^{ろう}を糧^{かて}としている人もいれば、巧みな航海術をもって生活の糧としている人もいます。こういった人々を総称して海人と呼ぶようにしています。

紀元前、長江河口部を中心として、東シナ海沿岸に広く分布していた原住民は「呉・越の民」と呼ばれ、船を巧みに操り、漁撈を営む人々であったといわれています。彼らは、「断髪・文身」など南方的な習俗を有していたといわれています。断髪とはザンバラ髪・文身とは入墨（刺青）のことです。

日本では、『魏志倭人伝』倭人の条に対馬の習俗として「今倭の水人好く沈没し、文身し亦以って大魚、水禽を厭う」と文身の記述があります。『三国志』韓伝にも同様に文身の記述があります。潜水に長けた海人の分布は、朝鮮半島南部・済州島・九州から瀬戸内にまで及んでいます。古い文献によると「泉郎」「白水郎」と書かれアマと訓じています。



海人にとって、ふんどしを長くしたり、自分を大きく見せたり、恐く見せたりすることは、咬龍^{こうりゅう}の害を避けるための共通する習俗なのです。考古学でもそのことを裏付ける遺物が発見されています。

左上は香川県善通寺市仙遊遺跡^{せんゆう}の箱形石棺^{せつかん}に描かれた人物で、左下は愛知県亀塚遺跡で見つかった土器に描かれた人物です。右は、和歌山県井辺八幡山古墳^{いんべはちまんやま}で見つかった埴輪で、文身とふんどしをしています。かつて海人が瀬戸内海・名古屋の方にも分布していたことを示す資料といえるでしょう。

建 築彫刻の話 ⑨

写真は紀の川市桃山町にある三船神社の脇障子彫刻です。龍が剣に巻き付き、切っ先から飲み込もうとしています。背景は切り立った崖壁の間を流れ落ちる滝と水しぶきです。滝口の中央には岩があります。上に剣が立っています。



三船神社の脇障子彫刻

剣の柄は三鈷杵さんこしよという密教独特の仏具の形をしています。これは俱利伽羅剣りからけんという不動明王の持っている剣です。人間の邪悪な心、煩惱を打ち砕く剣だそうです。そしてこの剣に巻き付く龍は、俱利伽羅龍王りからりゆうおうといって不動明王が変身した姿だとされています。このような凶像は平安時代には既に出来上がっていたようです。建築彫刻に用いられたものとしては、室町時代の明応三年（一四九四）に建てられた奈良法隆寺の子院・北室院きたむろいん本堂の須弥壇しゆみだんにあります。三船神社と、とてもよく似た彫刻です。

それにしても、神社本殿の彫刻に不動明王を象徴する俱利伽羅龍王の彫刻が、どういう訳で採用されたのでしょうか。

三船神社本殿は天正一八年（一五九〇）に高野山の僧、木食もくじき其上人そのじゆんによって再建されたものです。三船神社のある安楽川庄あらかわは当時高野山領でした。しかも神仏が渾然としていた時代です。このような凶像はすんなりと受け入れられていたのでしょうか。それにしても、何故俱利伽羅龍王なのか、このことについては次回お話ししたいと思います。

（鳴海 祥博）

発 掘屋余話 ⑨ 竪穴住居のロマン

万葉を代表する歌人のひとり、山上憶良に、冷たい雨の降る夜、ひとつ屋根の下で家族が身を寄せ合つて眠る情景を詠った長歌があります。

『伏廬ふせいほの 曲廬まげいほの内に 直土ひたつちに 藁解わらとき敷きて 父母は 枕かたの方に 妻子どもは 足の方に 囲かみ居て ……』

この住居は地面を掘り窪めた竪穴住居たてあなでしょうね。その土間の上に直接藁を敷いた粗末なつくり。広さもさほどあるとは思えません。

憶良のこの歌は奈良時代初めのもですが、おそらくそれ以前の古墳時代も、さらに前の弥生時代も基本的にはこれと同じと云つていいでしょう。ただ、大きく言えば建物の形は、弥生時代は円形ですし、古墳時代になると方形に変わってきます。また、煮炊きや暖をとる施設も炉から竈かまどにと変わってきます。大きさは、直径六メートル、あるいは一辺五メートル前後が平均的な大きさでしょうか。そこでひと家族、五、六人が暮らしていたのでしょうか。

それにしても発掘で竪穴住居を掘るのが、一番好きです。とくにカマドや炉跡を掘っていて、当時の灰がそのまま出てきたり、火で赤く焼けた壁面を確認したときなどは、一瞬はるかな時空を超えて当時住んでいた彼らとともにいる気がします。

少しキザですが、もつとも発掘にロマンを感じるときと云つていいでしょう。これまで何十棟という竪穴住居を掘ってきましたが、そのつど感慨深い思いに駆られました。もつとも掘った数では竪穴住居よりお墓でしょうね。なにしろこれまでの人生、数限りなく墓穴を掘ってきましたから――。

（村田 弘）



催し物案内

和歌山県内の文化財関係イベント情報

(財)和歌山県文化財センター <http://www.wabunse.or.jp/>

○展示会「紀州の歩み」

会場：和歌山県民文化会館 1 F ギャラリー（和歌山市小松原通一丁目1番地）

期間：平成22年5月19日(水)～7月11日(日) 午前9時～午後5時

内容：京奈和自動車道関連遺跡や重要文化財旧中筋家住宅をはじめとして、平成21年度の埋蔵文化財調査、文化財建造物保存修理の成果を、出土遺物等と写真パネルにより展示解説を行っています。

和歌山県立博物館 <http://www.hakubutu.wakayama-c.ed.jp/>

○企画展「長沢芦雪の動物画」

期間：平成22年6月12日(土)～7月19日(月)

内容：江戸時代のなかば、紀州をおとずれた長沢芦雪は、障壁画の作品を多く描きました。この企画展では、成就寺・草堂寺・高山寺に残された作品の中から、動物を描いた作品を選んで展示します。芦雪ならではの、愛くるしい動物の数々をご鑑賞ください。

○企画展「江戸時代のくらしと活躍した人々」

期間：平成22年7月24日(土)～9月9日(木)

内容：江戸時代、城下町和歌山は全国有数の都市として発達しました。また、紀伊国では、気候や風土の特性に応じた産業も発達しています。江戸時代に和歌山の人々がどんなくらしをしていたのか、またどんな人たちが活躍したのか、残された歴史資料から紹介します。

県立紀伊風土記の丘 <http://www.kiifudoki.wakayama-c.ed.jp/>

○企画展「水の考古学～人と水との関わり方の歴史～」

期間：平成22年7月13日(火)～9月12日(日)

内容：水と人の関わり方の歴史について、考古資料を中心に展示。夏休み期間で、子供向けのクイズ問題を用意する。

和歌山市立博物館 <http://www.wakayama-city-museum.com/>

○特別展「よみがえる和歌山の縄文世界 一人・暮らし・祈り」

期間：平成22年7月17日(土)～9月12日(日)

内容：近年、和歌山県内では川辺遺跡・鳴神貝塚(和歌山市)、徳蔵地区遺跡(みなべ町)などで縄文時代の貴重な発見が相次いでいます。解明されつつある縄文人の姿を最新の研究成果とともに紹介します。

(財)和歌山県文化財センター現場事務所等一覧

【埋蔵文化財課分室】

◎和歌山市新在家61番地-4

TEL 073-472-3710

◎和歌山市土佐町2丁目58-3

TEL 073-427-6174

【文化財建造物修理事務所】

◎金剛三昧院保存修理事務所

伊都郡高野町高野山425

TEL 0736-56-5578

風車 51 (2010 夏号)

平成22年6月30日発行

(財)和歌山県文化財センター

〒640-8404

和歌山市湊 571-1

TEL 073-433-3843

FAX 073-425-4595

Email maizou-1@wabunse.or.jp

URL <http://www.wabunse.or.jp>

目次

1 表紙 金剛三昧院客殿及び台所

2 特集 重要文化財金剛三昧院保存修理工事

「客殿及び台所の修復トピックス」

5 埋蔵文化財課 短信

6 連載コラム 考古学の散歩道

「海人の世界」

7 きのおくに歴史小話

「建築彫刻の話」

「発掘屋余話」

8 催し物案内